

2010年10月25日

箱根町教育委員会
教育長 小林恭一 殿

社団法人 日本建築 関東支部
支部長 時松 孝次

旧三井鉦山箱根山荘“環山”の保存に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より本会の活動につきましては多大なご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、貴町木賀953の旧三井鉦山保養所内に建つ田舎家風の山荘“環山”について、現在、茅葺き屋根の腐朽とそれに伴う建物の傷みが大きいことから、所有者がその保存方法を検討中であると聞き及んでおります。

ご存知のように、同建物は、昭和初期に三井鉦山会長を務めた実業家・牧田環（1871-1943）の箱根山荘として大正一昭和初期に現在地に建てられた田舎家風の別荘建築であり、いずれも茅葺きの入母屋・寄棟の2つの異なる屋根を持つ建物が特徴といえます。建物の設計は、日本近代を代表する数寄屋建築師・仰木魯堂（敬一郎：1863-1941）と伝えられています。

“環山”の建物については、別紙「見解」に示しました通り、近代の箱根に栄えた財界人の別荘文化を象徴する貴重な遺構であること、また近代和風建築としても特に財界人の好んだ近代特有の数寄屋建築のタイプ“田舎家”の貴重な現存遺構であるという点において、日本の文化史上、また日本近代建築史上、極めて価値の高い建物といえます。

明治末期から昭和初期にかけて、箱根には財界人が数多く別荘を構えたことにより、和風・洋風ともに質の高い別荘建築が数多く建てられ、特に和風別荘については、益田孝や団琢磨をはじめとする三井系の財界人が中心となり、茶の湯を自由に楽しむために既存の民家を移築・改修した“田舎家”と呼ばれる建物を建てるのが流行しました。しかし、すでに多くが消失し、現存する建物は極めて少なくなっています。

貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ歴史的価値についてあらためてご理解いただき、この地域にとってかけがえのない文化遺産であるこの建物を、箱根町の「文化財」として大切に保存・活用するようご検討いただきたく、ここにお願い申し上げます。

なお、日本建築学会といたしましては、この建物の保存・活用に関してできる限りのご協力をさせていただき所存であることを申し添えます。

敬具

2010年10月25日

日本コークス工業株式会社
代表取締役社長 小倉清明 殿

社団法人 日本建築学会 関東支部
支部長 時松 孝次

旧三井鉱山箱根山荘“環山”の保存に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より本会の活動につきましては多大なご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、貴社が箱根町木賀953に所有する山荘“環山”は、現在、茅葺き屋根の腐朽とそれに伴う建物の傷みが大きく、その保存方法について検討中であると聞き及んでおります。

ご存知のように、同建物は、昭和初期に三井鉱山の会長を務めた実業家・牧田環（1871-1943）の箱根山荘として大正一昭和初期に現在地に建てられた田舎家風の別荘建築であり、いずれも茅葺きの入母屋・寄棟の2つの異なる屋根を持つ建物からなる点が特徴といえます。建物の設計は、日本近代を代表する数寄屋建築師・仰木魯堂（敬一郎：1863-1941）と伝えられています。

明治末期から昭和初期にかけて、箱根には財界人が数多く別荘を構えたことにより、和風・洋風ともに質の高い別荘建築が数多く建てられ、特に和風別荘については、益田孝や団琢磨をはじめとする三井系の財界人が中心となり、茶の湯を自由に楽しむために既存の民家を移築・改修した“田舎家”と呼ばれる建物を建てるのが流行しました。しかし、すでに多くが消失し、現存する建物は極めて少なくなっています。

“環山”の建物については、別紙「見解」に示しました通り、近代の箱根に栄えた財界人の別荘文化を象徴する貴重な遺構であること、また近代和風建築としても特に“数寄者”の好んだ近代特有の数寄屋建築のタイプ“田舎家”の貴重な遺構であるという点において、日本の文化史上、また日本近代建築史上、極めて価値の高い建物といえます。

貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ歴史的価値についてあらためてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産の価値を最大限に活かした保存・活用が行われますよう、格別のご配慮を賜りたく、お願い申し上げます。

なお、日本建築学会といたしましては、この建物の保存・活用に関してできる限りのご協力をさせていただき所存であることを申し添えます。

敬具

2010年10月25日

三井化学株式会社
代表取締役社長 田中稔一 殿

社団法人 日本建築学会 関東支部
支部長 時松 孝次

旧三井鉱山箱根山荘“環山”の保存に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より本会の活動につきましては多大なご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、貴社が箱根町木賀953に所有する山荘“環山”は、現在、茅葺き屋根の腐朽とそれに伴う建物の傷みが大きく、その保存方法について検討中であると聞き及んでおります。

ご存知のように、同建物は、昭和初期に三井鉱山の会長を務めた実業家・牧田環（1871-1943）の箱根山荘として大正一昭和初期に現在地に建てられた田舎家風の別荘建築であり、いずれも茅葺きの入母屋・寄棟の2つの異なる屋根を持つ建物からなる点が特徴といえます。建物の設計は、日本近代を代表する数寄屋建築師・仰木魯堂（敬一郎：1863-1941）と伝えられています。

明治末期から昭和初期にかけて、箱根には財界人が数多く別荘を構えたことにより、和風・洋風ともに質の高い別荘建築が数多く建てられ、特に和風別荘については、益田孝や団琢磨をはじめとする三井系の財界人が中心となり、茶の湯を自由に楽しむために既存の民家を移築・改修した“田舎家”と呼ばれる建物を建てるのが流行しました。しかし、すでに多くが消失し、現存する建物は極めて少なくなっています。

“環山”の建物については、別紙「見解」に示しました通り、近代の箱根に栄えた財界人の別荘文化を象徴する貴重な遺構であること、また近代和風建築としても特に“数寄者”の好んだ近代特有の数寄屋建築のタイプ“田舎家”の貴重な遺構であるという点において、日本の文化史上、また日本近代建築史上、極めて価値の高い建物といえます。

貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ歴史的価値についてあらためてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産の価値を最大限に活かした保存・活用が行われますよう、格別のご配慮を賜りたく、お願い申し上げます。

なお、日本建築学会といたしましては、この建物の保存・活用に関してできる限りのご協力をさせていただき所存であることを申し添えます。

敬具

2010年10月25日

株式会社商船三井
代表取締役社長 武藤光一 殿

社団法人 日本建築学会 関東支部
支部長 時松 孝次

旧三井鉱山箱根山荘“環山”の保存に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より本会の活動につきましては多大なご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、貴社が箱根町木賀953に所有する山荘“環山”は、現在、茅葺き屋根の腐朽とそれに伴う建物の傷みが大きく、その保存方法について検討中であると聞き及んでおります。

ご存知のように、同建物は、昭和初期に三井鉱山の会長を務めた実業家・牧田環（1871-1943）の箱根山荘として大正一昭和初期に現在地に建てられた田舎家風の別荘建築であり、いずれも茅葺きの入母屋・寄棟の2つの異なる屋根を持つ建物からなる点が特徴といえます。建物の設計は、日本近代を代表する数寄屋建築師・仰木魯堂（敬一郎：1863-1941）と伝えられています。

明治末期から昭和初期にかけて、箱根には財界人が数多く別荘を構えたことにより、和風・洋風ともに質の高い別荘建築が数多く建てられ、特に和風別荘については、益田孝や団琢磨をはじめとする三井系の財界人が中心となり、茶の湯を自由に楽しむために既存の民家を移築・改修した“田舎家”と呼ばれる建物を建てるのが流行しました。しかし、すでに多くが消失し、現存する建物は極めて少なくなっています。

“環山”の建物については、別紙「見解」に示しました通り、近代の箱根に栄えた財界人の別荘文化を象徴する貴重な遺構であること、また近代和風建築としても特に“数寄者”の好んだ近代特有の数寄屋建築のタイプ“田舎家”の貴重な遺構であるという点において、日本の文化史上、また日本近代建築史上、極めて価値の高い建物といえます。

貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ歴史的価値についてあらためてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産の価値を最大限に活かした保存・活用が行われますよう、格別のご配慮を賜りたく、お願い申し上げます。

なお、日本建築学会といたしましては、この建物の保存・活用に関してできる限りのご協力をさせていただき所存であることを申し添えます。

敬具

2010年10月25日

三機工業株式会社
代表取締役社長 有馬修一郎 殿

社団法人 日本建築学会 関東支部
支部長 時松 孝次

旧三井鉱山箱根山荘“環山”の保存に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より本会の活動につきましては多大なご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、貴社が箱根町木賀953に所有する山荘“環山”は、現在、茅葺き屋根の腐朽とそれに伴う建物の傷みが大きく、その保存方法について検討中であると聞き及んでおります。

ご存知のように、同建物は、昭和初期に三井鉱山の会長を務めた実業家・牧田環（1871-1943）の箱根山荘として大正一昭和初期に現在地に建てられた田舎家風の別荘建築であり、いずれも茅葺きの入母屋・寄棟の2つの異なる屋根を持つ建物からなる点が特徴といえます。建物の設計は、日本近代を代表する数寄屋建築師・仰木魯堂（敬一郎：1863-1941）と伝えられています。

明治末期から昭和初期にかけて、箱根には財界人が数多く別荘を構えたことにより、和風・洋風ともに質の高い別荘建築が数多く建てられ、特に和風別荘については、益田孝や団琢磨をはじめとする三井系の財界人が中心となり、茶の湯を自由に楽しむために既存の民家を移築・改修した“田舎家”と呼ばれる建物を建てるのが流行しました。しかし、すでに多くが消失し、現存する建物は極めて少なくなっています。

“環山”の建物については、別紙「見解」に示しました通り、近代の箱根に栄えた財界人の別荘文化を象徴する貴重な遺構であること、また近代和風建築としても特に“数寄者”の好んだ近代特有の数寄屋建築のタイプ“田舎家”の貴重な遺構であるという点において、日本の文化史上、また日本近代建築史上、極めて価値の高い建物といえます。

貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ歴史的価値についてあらためてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産の価値を最大限に活かした保存・活用が行われますよう、格別のご配慮を賜りたく、お願い申し上げます。

なお、日本建築学会といたしましては、この建物の保存・活用に関してできる限りのご協力をさせていただき所存であることを申し添えます。

敬具

2010年10月25日

旧三井鉾山箱根山荘“環山”についての見解

社団法人 日本建築学会関東支部

歴史意匠研究専門委員会

主査 山崎鯛介

旧三井鉾山箱根山荘“環山”は、神奈川県足柄下郡箱根町木賀953の敷地内に建つ木造平家・茅葺き屋根の山荘で、昭和初期に三井鉾山の社長を務めた実業家・牧田環（1871-1943）の箱根別荘として建設された。建設時期は不明であるが、牧田環がこの土地を取得したのが大正5年7月4日（土地台帳による）で、昭和3年以降しばしば箱根に赴いている（『牧田環伝記資料』より）ことから、大正～昭和初期の建設と考えられる。設計者は仰木魯堂（敬一郎：1863-1941）と伝えられている。仰木は、隣接する旧塩原又策箱根別荘も手がけており、これも同様に田舎家であることから、環山の設計者が仰木魯堂である可能性は高いといえる。敷地は、国道138号線沿いの木賀温泉から箱根登山鉄道強羅駅へと抜ける県道732号沿いの傾斜地で、建物は敷地北側の平らな高台の地を選んで茅葺き屋根の建物2棟を東西方向に並べ、南側の崖地を臨むように配置されている。なお、敷地南側の崖地には川の流水を活かした回遊式の広大な庭園が作られている。

建物は、入母屋・茅葺き屋根の広間棟（約120㎡）と寄棟・茅葺き屋根の茶室棟（約49㎡）からなる。西側の広間棟はほぼ正方形の平面で、13畳の主室「残月の間」と次の間6畳の四周に廊下（南・西は1間幅の畳廊下、東・北は台目幅の板廊下）を巡らし、西側に玄関・土間を、東側に茶室棟への渡り廊下を付設している。茶室棟は南北方向に長い平面で、南側に土間席、北側に床に大炉を切った「大炉之間」を設け、その東側に3畳半の小間の茶室を付設している。室内意匠は全体としておおらかで開放的な印象を与えるもので、「残月の間」では内法高・天井高をともに通常より高く設定し、本来は2畳の上段を3畳に広げ、また書院窓を掃き出しの花頭窓とするなどの創意工夫が見られる。大炉の間では天井に煙出しを設け、また土間席の天井を簀の子にするなど田舎家の風情を最も良く表現している。小間の茶席は、床柱や天井に桐材を多用した独特の意匠で、庭側には躡り口を設けず、掃き出しの開口部を設けている点が特徴的である。このように、“環山”には格調高い座敷である「残月の間」、田舎家風の土間席・大炉之間、開放的な小間の茶室といった、タイプの異なる3つの部屋が用意されており、茶の湯を多様に楽しむための工夫が凝らされている。これは箱根湯本の「松の茶屋」（旧有賀長文別荘、仰木魯堂設計）とよく似た構成であり、このことも仰木魯堂の関与を裏付けるものといえる。なお、平面の基準寸法は、広間棟が6尺柱間真々、茶室棟が6尺3寸畳割りとなっている。

建物の現状は、1981（昭和 56）年頃に改修工事が施されたが、その後の経年劣化として特に茅葺き屋根の傷みが激しく、屋根面に多数の植物が寄生して茅の腐朽を一層進行させているほか、化粧屋根裏には雨漏りによるシミや木部の腐朽が見られる。また、柱の根元や腰壁などにも木部の腐朽が見られる。

以上のような特徴を持つ“環山”であるが、その建築史的価値を要約すると、大きく以下の2点が指摘できる。

1. 近代の箱根に栄えた財界人の別荘文化を伝える貴重な遺構としての価値

近代の箱根における財界人の別荘文化は、1904（明治 37）年に岩崎弥之助が湯本に和館・洋館併置式の別荘（和館のみ吉池旅館に現存）を建設したのに始まり、明治末～大正期には益田孝らによって強羅地区の別荘地分譲が本格化した。強羅に現存する別荘建築としては、旧閑院宮別荘（現・強羅花壇）や旧岩崎康弥別荘（現・強羅環翠楼）、旧藤山雷太別荘（現・世界救世教神山荘）などがあるが、多くは既に失われており、近年も松永安左エ門の旧別荘である田舎家「諸戸山荘」が取り壊された。また、ほぼ同時期に小涌谷地区では三井八郎右衛門高棟や団琢磨など三井系の財界人が別荘を建設したが、いずれも現存しない。木賀・宮城野地区には、大正期に入って温泉場が復興するのに伴い、古河虎之助別荘（現存せず）や牧田環別荘（現・環山）、塩原又策別荘（現・服部別荘）といった財界人の別荘が建設された。このように、箱根に建設された財界人の別荘は、箱根の近代史を語る上で不可欠の要素であるが、その遺構は数少なくなってきたおり、現存する牧田環の別荘“環山”の存在価値は、極めて高いといえる。

2. “数寄者”の好んだ近代特有の数寄屋建築のタイプ“田舎家”の貴重な遺構としての価値

明治から昭和初期にかけて茶の湯の世界に活気を与えたのは、“数寄者”と呼ばれた政財界の実力者たちで、彼らは当時、海外流出しつつあった古美術品を積極的に蒐集しつつ、それを茶の湯の世界に持ち込み、従来の伝統的な作法を尊重する茶道とは異なる自由な茶の湯を考案した。この“数寄者の茶の湯”では、自由な造形の古美術品を楽しむための“おおらかな茶室空間”が必要とされ、明治期には三井の益田孝（鈍翁）とその弟・克徳によって、古民家を移築改修した茅葺き屋根の“田舎家”と呼ばれる茶室が建てられ、これが数寄者の間で大流行した。仰木魯堂は明治末期～昭和初期に活躍した代表的な数寄屋建築師で、こうした“田舎家”を得意とし、数多く手がけた。

仰木魯堂の田舎家は、政財界人の東京本邸または小田原・箱根などの別荘地に数多く建てられたが、東京本邸の建物は震災・戦災を経て既になく、箱根においては、強羅公園の白雲洞茶室が登録文化財になっているものの、団琢磨の仙石原別荘や松永安左エ門の別荘（旧諸戸山荘）は既になく、旧牧田環別荘であるこの“環山”以外では、旧塩原又策別荘（服部別荘として現存）や箱根湯本の“松の茶屋”など数棟を残すのみとなっており、その歴史的価値は極めて高いといえる。